

まちづくりワークショップ研修—計画立案や協同学習のための討論技術習得講座
第3回 (2013.02.08) 「あいさつ通り」の看板を立てればみんな挨拶するようになる？

第三回目は (平成 25 年 2 月 8 日)、「PDCAをCベースで考える」をテーマに、グループ討論をした。

Plan・Do・Check・Action (計画、実行、評価・改善) のPDCAサイクルは、どのような成果を出すために、どのようなことをどれだけするのか。また、本当にそれをする事で成果がでるのかを考えることだ。つまり、成果目標、事業目標、事業と成果の因果関係、それに成果の計測の方法を明確化しておくことである。その際、成果を数値で表現するセンスが求められる。例えば、「わくわく都市くまもと」を標榜するとき、都市のわくわく度合いが高まったことを、いかに数値で示すかがカギになる。まちなかで、くまモンがサプライズで現れる回数が増えるほど (施策、事業)、まちのわくわく度 (成果) は上がりそうだ。それは、アンケートで「まちに来る理由、まちに出るのが楽しいか」などの市民意識を把握することで検証できそうだ。たさし、このような調査をPと同時にしておかねばならない。それが決まっていないと、往々にして、事前の数値を計測し忘れてしまう。このように、くまモン効果のシナリオを描き、本当にそうなるか計測し検証するのがCだ。Cの方法を事前に深く考えれば、成果目標の設定やPDAも深めることができる。

研修では、その練習として「虫歯予防の絵画コンクールに参加した小学校は、その後に児童の平均虫歯保有数が減るか」について、その検証方法を話し合った。その結果、どうも減りそうにないし、絵画が上達しそうにもない。そもそも成果の目標は何なんだ？ということになった。今ある施策について、Cの方法をみんなで考える作業は、とても有効だ。説明責任を果たすこと、あるいは合意や納得は、Cの方法を最初から共有している者の間であれば、やりやすいはずだ。「あいさつ通り」の看板を立てても、あいさつする人は増えそうにない。だったら、いったい何のために看板を立てるのだろうか？ (公務員やまちづくりコンサルタントに就職が決まった学生諸君、どうよ!?)



文責・講師：前田 (工房研究員 20130208)